

P17

( タイトル )

## A new standard from Yamanaka Onsen

Kaga Lacquerware, Ishikawa

( リード )

彼らの技術の追究はとどまるところを知らない。山中漆器で知られる山中温泉に現れた逸材を紹介しよう。

( キャプションP17 )

左ページ・蒔絵(まきえ)師・山崎夢舟(むしゅう)氏作の万年筆の作品。漆を盛って研ぐ高度な技を使って、唐獅子や貝など吉祥の蒔絵を施している。一本のペンに描かれた重厚な世界は書斎の景色を一変させる。

右・木地師で漆作家の中嶋武仁(たけひと)氏の手によるスタイリッシュなぐい呑み。材は栃。通常背の低いぐい呑みに、持ちやすい脚をつけて高さと同時に安定感を出している。とっておきの日本酒にふさわしい酒器だ。

P18-19

( キャプション )

回転する轆轤にはめられた生地に中嶋武仁氏が自作の匏(かんな)を当てると、みるみるうちに美しい椀が形を見せはじめる。山中の轆轤は縦に木取りをする(輪切りの状態に材を取る)ため、頑丈なのが特徴。

P20-21

( 見出し )

漆というエコロジカルな美

( 本文 )

山中温泉における漆器の歴史はおよそ400年前に木地師の集団が移住したことに始まる。木地師――つまり轆轤(ろくろ)を使って漆器の地となる木製の椀や盆などを成

形する職人たちだ。当時は今より鬱蒼とした豊かな森があったのかもしれないが、山中は優れた轆轤の技術で知られ、現在も60人近くの木地師がいる。そして塗師(ぬりし)や蒔絵(まきえ)師、問屋などと共に産地を形成している。

「このプラスチックみたいな木の器のどこに価値があるんだろう？」

木の国の民であるたいていの日本人は漆塗りのお椀や箸などに触れているから、それが漆を塗った特別な器だと知っているが、木の文化的背景をもたない国の人がそう思うことはよくある。いったい漆の何が優れているのか。

漆は、ウルシ科の落葉高木、ウルシが分泌する樹液である。日本産漆の主成分はウルシオールという高分子化合物で、皮膚に発疹をおこす毒素でもある。

この樹液が「乾く」ためには、生漆に含まれるラッカーゼ(酵素)の作用による酸化縮重合という化学反応を要する。それには20~25°Cの温度と60~80%の湿度という条件が必要で、普通、塗師は「室(むろ)」と呼ばれる湿度を管理した木の棚で漆器を乾かす。

ところが扱いの面倒なこの樹液は、一度乾くと驚くべき強さを発揮する。水、熱、塩、酸、アルカリに強く、金を溶かす王水にもびくともしない。優れた防腐性、抗菌性をももち、泥水に浸かっていた2000年前の漆器はまだ輝きを保っていた。

また、漆は極めてエコロジカルな素材だ。

漆の樹皮に傷をつけ、樹液を一滴一滴かき集めるのが伝統的な漆採取法だが、15年育てた1本の木から採取できるのはわずか200g程度。しかし1000年以上もつ素材が15年で再生産ができるのである。何万年もかけてできた石油を用いて多くのエネルギーを使ってできるプラスチックと比べるまでもない。

そして漆の塗膜は、しっとりとした透明感のある美しさをものに与える。

古代人は森の中で漆の樹液が固まっているのを見てまずそれを接着剤として使った。次にそれを塗料として用い、やがてそこに美を見出した。山中温泉からさほど遠くない福井県の鳥浜貝塚からは美しい朱漆の櫛が見つかっている。6000年以上前の人々が既に漆の加工技術をもち、美術的な価値を知っていたのだ。

## ( キャプションP20 )

大聖寺(だいしょうじ)川沿いに山中の街が広がる。紅葉の美しい鶴仙溪には総ヒノキ造りのこおろぎ橋がかかる。山中は漆器の街であると共に、鎌倉時代に開湯され、『奥の細道』の俳人芭蕉も逗留した歴史と魅力ある温泉地でもある。温泉街の中心には、山中漆器の職人たちが内装に蒔絵を施した「山中座」と、風雅な日本建築の共同浴場「山中温泉総湯 菊の湯」があり賑わいを見せている。

## ( キャプションP21 )

掻き跡が残る漆

## P22-23

### ( 見出し )

進化する木の技、蒔絵の技

### ( 本文 )

そんな縄文からの美意識を継承しているかもしれない、特に注目したい二人の作家を紹介しよう。

中嶋武仁( たけひと )氏は、屈指の轆轤の使い手であり、挽き物の作家だ。自ら作った道具で木を挽き、漆も手がける。

山中の電動轆轤は、回転軸に木地を金属などで固定しない。軸につけられた木枠に木地をぼんとはめるだけなので木地が傷つかないし、木地を削る面も簡単に換えられる。海外の轆轤作家から「怖くないのか? Crazy!」と言われるというが、しなやかな木の性質を生かしてこそその賢いやり方だ。回転方向を瞬時に換えられるのも山中の轆轤の特徴で、中嶋氏は一つのお椀をものの数分で挽いていく。

作品はどれも素晴らしいが酒器類はやはり魅力的だ。口当たりも繊細で、日本酒を飲むのにこれ以上ふさわしい器はないと思わせる。挽き物の技は薄挽きに見て取れる。限界まで薄くしたぐい呑みは、指で押せば曲がり、お酒の重みしか感じない。大理石のような光沢を放つ透き漆のモダンな作品も、新たな漆の表現領域にある。

そして、希代屈指の蒔絵師の山崎夢舟( むしゅう )氏。彼の蒔絵作品は、世界のコレクター垂涎の美術品だ。

蒔絵とは漆を使った加飾のことで、漆そのものを立体的に盛り上げたり、金粉や銀粉を蒔いて漆で固め研ぎ出したりして、地に絵や文様をつけていく。絵師としての表現力はもちろん、漆を少し塗っては乾かす作業の繰り返しによってしか一つの作品が完成しえないという、作品への執着心が要求される。

古美術品や名作の修復も手がける山崎氏は、後世への妥協は一切許さないようだ。それは作品を拡大鏡で見て初めてわかることで、素材も技術も隅々まで完璧なのである(漆で隠れた部分でさえも)。希代の蒔絵師・柴田是真(しばたぜしん)などに

よる、江戸時代後期（18-19世紀）に高度に発展した蒔絵技術にしか学ぶところはないと言いきる彼の作品は、現代の蒔絵に着々と新しい境地を切り開いている。

（キャプションP22）

上段・左から時計回りに

とろりとしたハチミツのような生漆。

枳の文様が透き漆に浮き出る酒器。（中嶋氏作）

ダイオウイカとマッコウクジラの戦いを高度な肉合高蒔絵で描いた印籠（江戸時代の装身具）。深海に思いを馳せ、根付には珊瑚を使っている。（山崎氏作）

挽き物の限界に挑んだ最薄のぐい呑み。感じるのはお酒の重みだけだ。

製作中の山崎夢舟氏。

下・山崎夢舟氏の作品『乾漆皿 華麗』。緻密な作業を重ねた大作。

枳材で作られた中嶋武仁氏作の深鉢。黒漆の光沢の中にうっすらと杳目が浮かぶ鉢の表情は幻想的かつ荘厳、そしてモダンだ。